

B7 現代の子どもの生活習慣および生活器具調査
目白学園女短大 谷田貝公昭 市立鳩ヶ谷小 村越晃 県立茅ヶ崎西浜高
○佐藤野里子

目的 子どもはその成長発達段階に即した、生活習慣や行動を身につけていくことが望まれる。その獲得、形成は、子どもを取り巻く環境に大きく影響を受けらるものと思われる。そして、生活習慣、行動は、子どもの将来の人格形成に関係する点においても意味深い。そこで、現代の子どもの生活習慣、行動の実態を調査し、その特徴を分析、検討することを試みた。また、生活環境の一要因として、家庭内の生活器具の所有実態を調査し、生活習慣の形成との関連を考察することを試みた。

方法 調査は小学生の子どもを持つ親を対象に質問紙法を行った。質問項目は基本的な生活習慣に関するものなど50項目である。また、電気製品などの生活器具53項目の中から、現在家庭で所有しているものを回答してもらった。調査期間は1990年10月、調査地域は埼玉県を中心とする関東地域である。調査数は、男子520名女子527名の計1047名である。

結果 生活習慣の回答を得点化した全項目の平均は、2.32となった。このことから全体として、生活習慣、行動はそれほど大きく乱れていないと思われる。しかし、項目を特徴別に分類した結果で見ると、「身辺自助」「睡眠」に関する領域の項目の得点が高い。最近一般的にいわれる、家庭の過保護的傾向の影響を受けていると思われる結果となった。

生活習慣と生活器具所有の結果のクロス集計を行った。生活器具の項目を50点満点になりように得点化し、平均(12.3)を求め所有状況の上位群、下位群に分けた。上位と下位とでは、生活習慣の結果に明確な差は見られなかった。これは、一億総中流化といわれるように、各家庭の生活水準が上昇、平均化してきた社会背景も関係していると考えられた。